

チエーリツプ 四季だより



▲「ウェディングベル」

▲ 新品種「ありさ」

『されどイングリッシュガーデン』

園芸ジャーナリスト 八尋 和子

初めて砺波を訪れたのは、ほぼ二十年前のことだ。当時、砺波の富山県農業技術センター野菜花き試験場長でおられた川田穰一さんが大学の先輩に当たることから、お誘いを受け球根生産で名高い砺波への興味とチューリップ見学の楽しみで、友人とともに出かけたのだった。

砺波に入るには、長良川鉄道から北上するのが最も美しいアプローチだからと川田さんに薦められて、そうすることにした。美濃白鳥まで、運転免許を取得したばかりの川田さんが奥様と車で迎えに来てくださり、途中白川郷で少し遊びながら、五箇山をへて砺波へと向かった。

ときには手に汗をにぎる場面もあったが、車は山道を走り続け、やがて目の前に眺望が開けた。眼下に広がる散居村。防風のための高い屋敷林に囲まれた家々が、水面に浮かぶ小島のように点在し、おりしも残照の中で陰影を増した美しい光景は、砺波の第一印象として強く心に刻み付けられた。幻想的なシーンだった。

翌日、試験場の圃場に入れてもらった。咲き競うチューリップの驚くほどの品種の数々、その華やかさに仰天し、

夢中でシャッターを切ったことを覚えている。それは私がカメラを始めた頃でもあった。

ガーデニングブームの波及

その愛用のカメラをぶら下げて、イギリスの庭園に足しげく通うことになった。そして十年前、私自身のうちに園芸の本場であるイギリスへの関心が高まり、実情を知りたくて渡英したとき、日本ではイングリッシュガーデンがようやく注目され始めた頃だった。その後、美しい英国庭園のグラフィア写真が園芸雑誌に限らず多くのペー지를飾り、嵐のごとくガーデニングの本が氾濫したかと思うと、数年後には、引き潮のごとく書店の棚から減っていた。あまりに急増した園芸店やガーデンセンターが姿を消し、売上げも下降線をたどっているとの情報も入ってくる。イングリッシュガーデン・ブームは終わったときえいう人もいる。

しかし、このブームによって、人々の暮らしにガーデニングが少しずつ浸透し、従来の庭の概念を変え、日本の街並みに花や緑が増えたことに、異論はないだろう。そして十年前に比べれば、どれほど多種類の植物や庭園資材

がたやすく入手できるようになったとか。園芸雑誌には、海外の庭かと思まがうほどに花にあふれた読者の庭が登場し始めた。快適な暮らしへの願望は、住まいの改造とあわせた庭のリフォーム、さらに緑豊かな環境を求めて、個人の庭から町内、さらに都市へと、ガーデニングは伝染し、

コミュニケーション活動に発展している地域もある。イングリッシュであろうがジャパニーズであろうがこだわりなく、創作意欲に燃えた新しいガーデンスタイルが生まれている日本の街並みである。

ガーデニングは終わりになきアート

そんな日本の状況を背に感じながら、いまだに私のイングリッシュガーデン詣では続いている。今年には二年ぶりの訪問となった。好きな庭は何度訪ねても飽きない。

「ガーデニングは終わりになきアートだ」と表現したのは著名

なイギリス人ガーデンデザイナーだ。だから毎年様相が変わり、目の離せない庭がある。オーナーの飽くなきチャレンジ精神が伝わってくる庭。個性がとりわけ光っている場合だ。その光景と同じものを再び見ることはできない。訪れる時期によって、光や影、わたる



▲ヘスタークームの中のダッチガーデン。テラス式の一角には、大型の特製コンテナがバランスよく配置され、植栽に変化をもたらしている。

風、庭の雰囲気は二度と同じものはない。植栽も当然変わっているし、その年の天候による開花の早晩、出来・不出来もある。庭は生きているからだ。

今夏巡ったガーデンのうち、サマセット県のヘスタークームはすっかり様変わりしていた。十九世紀末に活躍した大きな影響を残した女性ガーデンデザイナー、ガートルード・ジークルと建築家エドウィン・ラッチェンスとの合作の庭園だ。彼が設計した庭の構造部分に変わりはないが、数年前訪ねたときとは異なる植物が植えられていた。もともと点在して印象的だったイトススキが姿を消し、代わりに、小型の

トウモロコシ、シャクヤク、クロコスミアなどが植わっていた。そして、ジークルが好んだとされるパステルカラーの色調が消え、鮮やかなダイアンサスの紅色がまぶしかった。しかし、何ともしっくりこない。

ちょうど作業をしていた人に、この変化を指摘したら、二十九年も務めているヘッドガーデナーで、そのわけを長々と説明してくれた。ジークルの植栽計画のノートが新たに発見されたとかで、実は、彼女はビビッドな色も好んで使っていたという新事実がわかった。石材で縁取った水路脇のボーダーは、総植え替えの途中で何もなかった。

石材のハード部分は歳月をものともせず、昔のままにたたずんでいるが、ソフト部分の植栽が変化すれば、庭の表情はこれほど変わるものかと、感動した一幕だった。まさに「庭は生きている」。だからおもしろい。

植物を熟知してこそその イングリッシュガーデン

もうひとつの印象深い庭は、ドーセット県のスティッキ・ウィケット・ガーデン。熟年の夫婦がコツコツと個性的なガーデンを一つずつ付け足し、それぞれが醸す幻想的なシーンで、奥へ奥へと客を誘う。その行き着く所にワイルドフラワーが咲き乱れるメドウガーデン。どれも意外性の連続だ。この庭には

岩もなければレンガもない。植物の高低で奥行きを出し、何種類ものグラス（イネ科植物）の穂がふわふわと変化をつける。イングリッシュガーデンのイメージを広げる、自由奔放な創作。

改めて思う。イングリッシュガーデンというくりをするならば、植物を巧みに操ったガーデンであるということ。植物を熟知してこそ、そしてきめの細かな世話がなされてこそ、かなえられる高度な技が垣間見られるから脱帽するのだ。だからこそ、終わりのないアートと言えるし、チャレンジ精神なくして奥義は究められない。今回、久々に心を揺さぶられる庭に出会ったことが、何よりもうれしかった。イングリッシュガーデンはもう飽きた、なんていう人は、不幸にもそんな優れた庭にめぐり会ったことがないにちがいない。

わが手による庭づくりに目覚め、庭のハードな構造部分を整えるのにいま夢中になっている日本のガーデナーたちが、やがてはまっていくのは、植物を上手に操る植栽研究だろう。イギリス人同様、植物への情愛深く緻密な技がお得意の日本人だから、きつと個性的な庭が増えてくると思う。

砺波の美しいチューリップ花壇の植栽も、いまだきのことだ、様々な混植の試みがなされているにちがいない。球根類と宿根草、灌木あるいはグラス類と、混植の可能性を引き出して見せてほしい。それを楽しみにまた長良川鉄道を北上して、訪ねてみたいものだ。

【プロフィール】

やひろ かずこ



園芸ジャーナリスト。RHS J（英国王立園芸協会日本支部）コンテナガーデンング協会事務局長。福岡県北九州市生まれ。九州大学農学部農学科卒業。

鹿児島県の高校生物教師を経て、フリーの編集者に転職。園芸書籍・園芸事典の編集に長年携わり、のちRHS J設立以来、会報誌の編集人を務める。

本場の英国園芸に啓発され、一九九二年に渡英。二年半の滞在中に英国各地の庭を訪ね、英国の園芸事情を取材。以後も毎夏長期滞在し取材活動を続け雑誌に連載。英国園芸家やガーデナーとの交友も幅広い。昨年からは現職に。著書『憧れのイングリッシュガーデン』（主婦の友社、訳書『屋上ガーデン・バルコニー・テラス』（婦人生活社）



▲スティッキ・ウィケット・ガーデンの一場面。グラスで囲んだ円形のベッドに、野趣に富んだ植物が集めてあり、繊細な配植が絶妙。

◀ 'ありさ'

「ありさ」 の 特 徴

- ・花色は赤紫色で、花壇植えとしては数少ない色である。
- ・咲き進んでも花型が乱れない。
- ・球根生産性が高い。
- ・球根腐敗病、微斑モザイク病に強い。
- ・十二月促成栽培で安定して開花する。



富山県産オリジナル
チューリップ新品種

農林23号『ありさ』

去る九月三日、富山県農業技術センター野菜花き試験場にて育成されたチューリップ、「ありさ」と「ウェディングベール」が農林登録され、お披露目となりました。

今回の登録は、一九九九年の「春乙女」(四季だよりくろいん掲載)以来三年ぶりのことで、富山県によって育成され農林登録された品種は、これで二十四品種となりました。



▲ 'ベン・パン・ザンテン'



▲ 'ドン・キホーテ'

『ありさ』

育成期間／一九七九～二〇〇一年

「ありさ」は、花色が赤紫色で、茎や葉が強健な花壇植え、切り花向けのチューリップを作ることを目的に育成が行われました。一九七九年に、花色が藤桃色で茎葉が強健な品種、ドン・キホーテ／Don Quichotte、(トライアンフ群)と促成栽培に適応性がある、ベン・パン・ザンテン／Ben van Zanten、(トライアンフ群)が交配されました。交配で得られた種子を蒔いて六年間養成した後、赤紫色の花を持ついくつかの系統について、増殖をしながら選抜、検定を繰り返しました。そして、一九九九年より三年間、全国七ヶ所の試験場で系統適応性検定試験が行われた結果優秀と判定されたため、今年「ありさ」として農林登録されたものです。

「ウェディングベール」▶



農林24号 「ウェディングベール」



「ウェディングベール」 の 特 徴

- ・ユリ咲き品種としては数少ない白色である。
- ・十二月出し促成栽培で安定して開花する。
- ・切り花の花持ちが良い。
- ・球根生産性が高い。



『ウェディングベール』
〔育成期間／一九八三～二〇〇一年〕
白色のユリ咲きで、花壇植えや切り花栽培に適した品種を作ること
を目的に一九八三年から育成が行
われました。花色が白色で促成栽
培に適応性のある品種「アスリート
／Athleet (トライアンフ群)」と花
弁の先が細長く尖っている野生種
のチューリップ、アクミナータ／
Tulipa acuminata、が交配されま
した。その種子を六年間養成した
後、白色のユリ咲き系統について
増殖をしながら選抜検定を繰り返
しました。その後、前述のような
適性試験が二〇〇〇年から二年間
行われ、優秀と認められたので、
今年「ウェディングベール」とし
て農林登録が行われたものです。



▲「アスリート」



▲「アクミナータ」



▲チューリップ品種保存ほ場

この「ありさ」と「ウェディングベール」は種苗登録申請中であることと、まだ球根数が少ないため、市場に出回り一般に購入できるようになるのは、残念ながらもう少し先のことになります。

『チューリップブーインス・プレーシヨンの泉の四〇〇年』

〈パートII〉

チューリップの人為的伝播

十二世紀の文献によると、自生のチューリップを発見したことによって最初にチューリップの栽培研究を行ったのは、ペルシアとトルコであろうと推測されます。その国の栽培園はとても重要視され、チューリップが一つの役割を担っていたのです。

十六世紀初頭、アトラス出身の植物学者カルロス・クルシウスはウィーンの宮廷に勤め、皇帝の庭を任されていました。彼はそこで、数年間トルコのコンスタンティノープルに駐在しウィーンに戻っていた、オジール・ギスラン・ド・ブスベクを通して、チューリップと出合うことになりました。

チューリップの名前の由来もこのブスベクが関わっています。彼はトルコで出会った植物を「チューリパン」と名付けました。方言を誤解したのかもしれませんが。トルコ語でチューリップは、'Lale'。人々が「ターバン（トルコ語では、'Dulband'）に似た花だ」と言うのをブスベクは花の名前だと解釈してしまったのです。現在、植物学

上の学名は、'Tulipa'、オランダでは、'Tulp'です。

一五九二年にクルシウスがライデン大学の植物園長に任命され、チューリップの球根をいくつか手荷物に入れてライデンへやってきました。一五九三年、オランダで栽培されたチューリップが初めて開花し、翌一五九四年には植物園で初めてチューリップがお目見えしました。他のヨーロッパ諸国のドイツ、フランス、イタリアへも同様に広まってきました。

その当時、チューリップで商売をしようなどとは誰も考えてはいませんでした。収集された植物は、主に装飾用で、最初は薬効が高く評価されていました。チューリップの商業用栽培が最初に行われたのはオランダでした。

第一期 一五九四年～一六五〇年

クルシウスの植物園で美しいチューリップが咲くようになりました。「売って欲しい」と言われることが何度もありましたが、クルシウスは決してチューリップを譲りませんでした。

◀現在のライデン大学植物園

De Heij（オランダ・リッセ市チューリップ博物館発行）より





彼が研究対象として興味を持ち始めた頃、彼のコレクションをねらう者も現れました。そして、植物園のコレクションはあつという間になくなってしまいました。盗まれたのです。その後、少しして、花及び植物栽培者の大規模な組合、『Gild（ギルド）』のあるハールレム周辺で、商業ベースのチューリップ栽培が始まりました。ここでは、最適なチューリップの管理が行われていました。そして、リール（フランス北部の都市）周辺にも栽培センターができ、「販売用」のチューリップ栽培が行われるようになりました。

特にヨーロッパの貴族たちの間でチューリップへの関心が高まります。中には職業としてチューリップを栽培しようとする者も現れ、ある者は成功し、ある者は失敗しました。

ドイツの国王が、オランダでなぜチューリップ栽培に成功しているかを調べるため、三人の有能な園芸家を現地に派遣したことも知られています。彼らは、特にオランダの土壌（石灰分に富み、粒の粗い砂地）と気候が成功の理由であり、どちらもドイツにはないものであるという結論に達したのです。

当時、チューリップは球根を狭い間隔で植え、昆虫に受粉させる

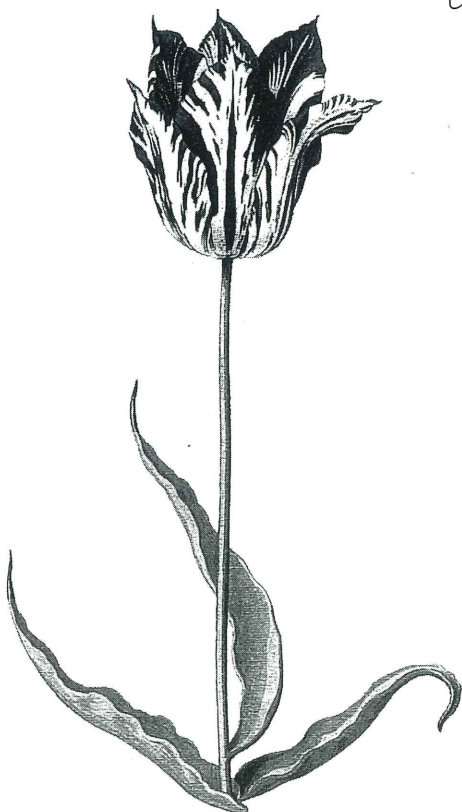
という方法で栽培が行われたと考えられています。その時期、トルコでは、花びらにとっても美しい色の縞模様のある（そのほとんどの原因がウィルス病であることはまだ知られていなかった）先のとがった形に人気がありました。

チューリップ栽培はいくつかの好条件（植物栽培に関する知識、土、気候）が揃うとうまく育てることができ、経済的でもありました。オランダの黄金時代には購買力のある民衆が多数いました。一方、ハールレム（オランダ西部の都市）の栽培家たちの作る球根は質の良いものでした。彼らは、それと同時に贅沢な暮らしのできる産物だと気付きました。誰にも負けないという貪欲さとうぬぼれもあり、チューリップへ殺到するようになり、そのため、価格は上がり続け、さらに売買が激化していききました。

栽培が始まりわずか半世紀足らずでオランダではチューリップの危機が生じます。偽りのないチューリップ熱であったものが、不当な商売が行われるようになってしまったのです。数多くの投機的な売買や賭けは、栽培家に止まらずオランダの一般国民をも巻き込み、新聞や風刺漫画はそ

の話題であふれていました。その熱が頂点に達するころ、球根一個に対して馬と馬車付きの家一戸が、まるでランプで出来た家のように簡単に支払われた（二六三七年）。その結果、財を失い、倒産したりこじきになったり……。そしてその後、愛好家以外もう誰もチューリップに関心を持たなくなったのでした。

〈次号へつづく〉



▲当時人気のあったチューリップ「センベル・アウグスツス」



▶当時チューリップ球根と交換された品の例
(チューリップ四季彩館ミュージアムより)

チューリップ四季彩館
からのお知らせ

○クリスマス展示

『アメリカン クリスマス ガーデン』

満天の星空を思わせる電飾と色とりどりのポインセチアで
華やかなクリスマスを演出します。

- と き: 11月14日(木)～12月24日(火)
- ところ: チューリップテラス

